

第3章 「共生」と社会的カテゴリーの脱構築の実証的検討

津多 成輔

1. 「共生」と社会的カテゴリーの脱構築

「共生」をめぐる重要な鍵概念として、社会的カテゴリーの脱構築がある。この社会的カテゴリーの脱構築に関して、岡本は、「共生」はプロセス概念であることを指摘した上で次のように述べている。

「共生」について考えることは、「あるもの」と「異なるもの」の関係性を対象化し、両者を隔てる社会的カテゴリー自体を組み直す営みだということになる。また、「共生」について先行する議論から確認できるのは、そのような社会的カテゴリーの更新が、理想状態の実現を目指すというよりは、それ自体が生み出す新たな隔たりや葛藤の可能性をも視野に入れた、継続的な営みにならざるをえないということである。社会的な摩擦や葛藤の温床となっている社会的カテゴリーを脱構築するとともに、その行為の根拠自体の被構築性を問い続けることが、「共生」によって社会の持続性を確保しようとする際に意識されることになる。(岡本, 2011, p. 39)

つまり、理論的枠組みにおいては「共生」にとって、社会的カテゴリーの脱構築は必要条件であるといえる。そこで本稿では、この理論的枠組みを参考に、様々な背景要因が社会的カテゴリーの脱構築を媒介して行為・認識枠組みに影響を及ぼすという作業仮説(次頁の図1)を想定し分析を行う。具体的には、①社会的カテゴリーの脱構築が人々の行為や認識枠組みに及ぼす影響を明らかにすること、②社会的カテゴリーの脱構築の背景要因を明らかにすること、①・②の結果を踏まえて、③背景要因が社会的カテゴリーの脱構築を媒介して行為・認識枠組みに及ぼすかどうかを明らかにすることを目的とする。

この分析によって明らかになる社会的カテゴリーの脱構築と人々の行為や認識枠組みの関係、社会的カテゴリーの脱構築に影響を及ぼす背景要因は、これまで理論的枠組みにおいて検討されてきた「共生」と社会的カテゴリーの脱構築の関係を実証的に検討するものとして重要であり、今後の「共生」の議論に重要な示唆を与えるものになり得る。

2. 社会的カテゴリーの脱構築の代理指標としてのステレオタイプ指標

前節で示した作業仮説(図1)に基づき分析を行う上で、社会的カテゴリーの脱構築を捉える必要がある。社会的カテゴリーが更新されるということは、個人の視点で見れば、特定の対象に対する認識枠組みが相対化されることとして捉えることができる。

例えば、看護師という職業は、従来、ピンクカラー¹⁾であると認識されてきた。そのよ

うな状況では、一方の性の職という認識が強まり、他方の性の就業機会が阻害されてきたことは想像に難くない。しかしながら、近年、職業を示す名称が「看護婦」から「看護師」に変化してきていることに象徴されるように、ピンクカラーの度合いは弱まっている²⁾。

このように、特定の対象を想起する言葉を用いることは、マジョリティーマイノリティという構図を生み出す。これらが単なる違いであれば問題はないが、上記のような就業機会に代表されるような権利が阻害される状況を生じた場合、これらは「共生」の問題として議論される。前述の看護師の例にも象徴されるように、不利に立たされる立場の者の権利が保障される際には、マジョリティの認識枠組みが変容することによって社会的カテゴリの更新がなされる場合が多い³⁾。

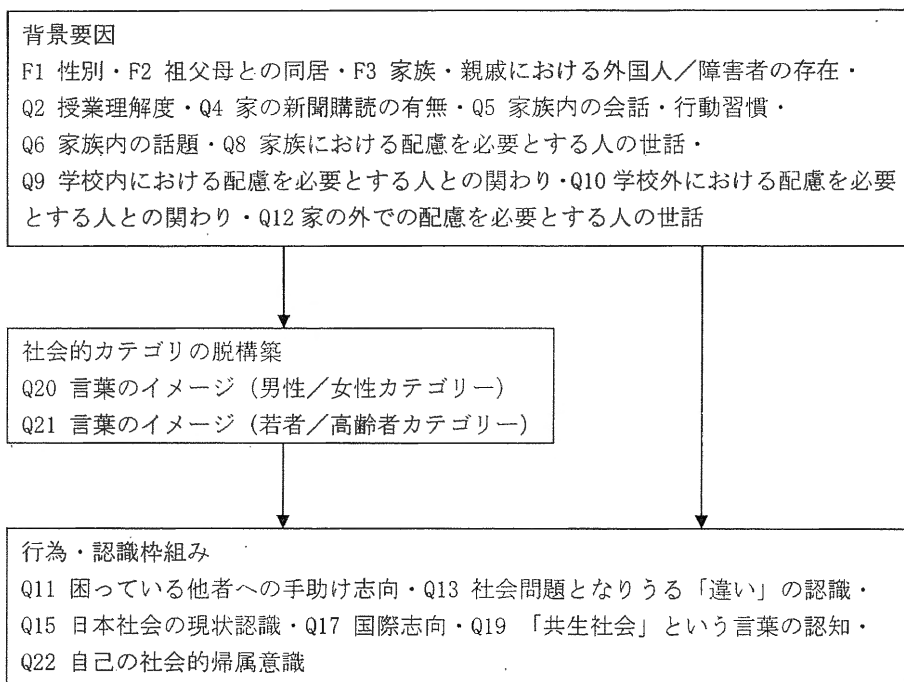


図1 本稿の作業仮説

そこで本分析においては、性という軸を設けた際に特定の一方の性をイメージしがちな語句(Q20)および年齢という軸を設けた際に特定の世代(Q21)をイメージしがちな(所謂、ステレオタイプを有する)語句に着目し、これを基にステレオタイプ指標を作成し、分析を行う。ただし、厳密には、ステレオタイプな認識枠組みを用いているかどうかの指標であるため、社会的カテゴリの更新を捉えるものではないことには留意する必要がある。しかしながら、中学校・高校段階においてはステレオタイプ的な認識枠組みの存在を認識して質問紙に回答していると考えられるため、ここでは非ステレオタイプな認識枠組みを用いる回答者は社会的カテゴリの相対化を行っている想定して分析を進める。

(1) ステレオタイプ指標【ジェンダー】

代理指標として用いることにしたステレオタイプの指標を作成するために、表1には、言葉のイメージ【男性-女性】(Q20)の単純集計結果を確認しておく。

表1 言葉のイメージ【男性-女性】(Q20)の単純集計結果(%)

	男性をイメージする	どちらかといえば男性をイメージする	どちらかといえば女性をイメージする	女性をイメージする	男性と女性の両方をイメージする	無回答
1. 黒いランドセル	72.9	21.4	0.3	0.2	4.9	0.4
2. 野球	59.7	29.6	0.2	0.2	10.0	0.4
3. 看護師	0.5	0.9	28.4	54.8	14.8	0.6
4. 泣く	1.0	0.5	26.6	16.0	55.6	0.4
5. 料理をする	1.0	1.2	24.1	20.5	52.9	0.3
6. 優しい	2.6	2.9	10.6	11.5	71.8	0.5
7. 医師	29.9	31.4	1.0	1.2	35.9	0.6
8. ゲーム機	33.2	31.8	0.4	0.3	33.9	0.5
9. 力が強い	64.7	23.6	0.4	0.6	10.3	0.4
10. ピアノ	0.9	1.2	29.8	35.2	32.6	0.4
11. 家族をお金の面で支える	33.5	27.3	2.3	3.6	32.8	0.5
12. 赤いランドセル	0.5	0.5	18.5	76.3	3.7	0.5
13. 校長先生	34.0	21.5	1.2	0.8	42.1	0.5
14. 子育てをする	0.5	0.7	29.0	35.3	34.1	0.4
15. サッカー	34.5	23.7	1.4	0.7	39.5	0.3

表1を見ると、項目によって両方をイメージする割合の大きさは異なるものの、すべての質問項目において男性または女性のどちらか一方に回答が偏る傾向が見られた。これを基に、マジョリティの回答をよりステレオタイプな回答傾向と捉えるために、表2に示したように言葉のイメージ【男性-女性】(Q20)の変数の値を変換した。

表2 言葉のイメージ【男性-女性】(Q20)の変数の変換

男性・・・Q1・2・7・8・9・11・13・15 →男性をイメージ：2，どちらかといえば男性をイメージ：1，その他：0 女性・・・Q3・4・5・6・10・12・14 →女性をイメージ：2，どちらかといえば女性をイメージ：1，その他：0
--

表2のように変換した変数について、主成分分析を行った結果が表3である。これを見ると、第一主成分はすべての項目で正の負荷量をとっていることから、その主成分得点を以下の分析ではステレオタイプ得点【ジェンダー】として取り扱う。なお、第二主成分、第三主成分も一定の固有値を有しているが、本稿では、あくまでも調査対象者のステレオタイプな認識枠組みを把握することを目的としているため、分析の観点からは除外する。

表3 言葉のイメージ【男性-女性】(Q20)の主成分分析の結果(N=1072)

成分	初期の固有値				成分		
	合計	分散の%	累積%		1	2	3
1	5.017	33.447	33.447	1. 黒いランドセル	.546	-.584	.267
2	1.289	8.591	42.038	2. 野球	.647	-.273	.001
3	1.016	6.775	48.812	3. 看護師	.593	-.143	-.053
4	.842	5.612	54.424	4. 泣く	.513	.334	.362
5	.801	5.339	59.763	5. 料理をする	.616	.328	.277
6	.759	5.062	64.825	6. 優しい	.426	.441	.489
7	.708	4.718	69.543	7. 医師	.568	.126	-.330
8	.697	4.650	74.193	8. ゲーム機	.638	.166	-.189
9	.674	4.492	78.684	9. 力が強い	.618	-.094	-.187
10	.616	4.105	82.789	10. ピアノ	.624	.151	.043
11	.584	3.895	86.684	11. 家族を金銭的に支える	.517	-.019	-.212
12	.560	3.733	90.417	12. 赤いランドセル	.517	-.591	.333
13	.535	3.564	93.982	13. 校長先生	.591	.049	-.303
14	.473	3.151	97.133	14. 子育てをする	.595	.067	-.012
15	.430	2.867	100.000	15. サッカー	.620	.084	-.256

(2) ステレオタイプ指標【世代】

言葉のイメージ【高齢者-若者】(Q21)についても同様の手順で、表4には言葉のイメージ【高齢者-若者】の単純集計結果、表5には変数の変換について、表6には変換した変数の主成分分析の結果を示した。主成分分析の結果、第一主成分はすべての項目で正の負荷量となったため、その主成分得点を以下の分析ではステレオタイプ得点【世代】として取り扱う。

表4 言葉のイメージ【若者-高齢者】(Q21)の単純集計結果(%)

	若者をイメージする	どちらかといえば若者をイメージする	どちらかといえば高齢者をイメージする	高齢者をイメージする	若者と高齢者の両方をイメージする	無回答
1. ITエンジニア	63.3	24.1	2.1	1.2	7.8	1.6
2. 盆栽	0.9	0.7	17.0	75.9	4.2	1.3
3. スノーボード	72.9	20.8	1.0	0.5	3.9	0.8
4. 社会に貢献する	20.7	20.7	6.6	4.4	46.5	1.1
5. テレビ	30.9	18.7	2.4	2.7	44.5	0.8
6. 礼儀正しさ	5.7	7.1	19.1	25.8	41.8	0.5
7. テニス	46.0	21.2	2.4	2.0	27.9	0.5
8. 説教をする	2.1	1.3	29.1	49.9	17.0	0.6
9. 農家	1.3	0.8	22.8	57.4	16.7	0.9
10. 恋愛をする	56.4	20.5	0.5	0.3	21.4	0.8
11. アイドルのコンサート	70.0	19.4	0.8	0.8	8.2	0.7
12. 面倒見の良さ	6.0	6.7	17.2	24.7	44.7	0.7
13. 政治家	3.7	3.0	28.4	40.5	23.4	0.9
14. ゲートボール	5.8	3.3	14.9	65.8	9.0	1.1
15. 大胆さ	30.2	18.9	4.4	7.9	37.8	0.8

表5 言葉のイメージ【若者－高齢者】(Q21)の変数の変換

若者・・・Q1・3・4・5・7・10・11・15
 →若者をイメージ：2，どちらかといえば若者をイメージ：1，その他：0
 高齢者・・・Q2・6・8・9・12・13・14
 →高齢者をイメージ：2，どちらかといえば高齢者をイメージ：1，その他：0

表6 言葉のイメージ【若者－高齢者】(Q21)の主成分分析の結果(N=1050)

成分	初期の固有値				成分		
	合計	分散の%	累積%		1	2	3
1	4.108	27.386	27.386	1. ITエンジニア	.443	-.087	-.247
2	1.375	9.167	36.553	2. 盆栽	.601	-.365	-.150
3	1.282	8.548	45.101	3. スノーボード	.631	-.058	-.314
4	.935	6.230	51.332	4. 社会に貢献する	.350	.527	-.311
5	.884	5.892	57.224	5. テレビ	.512	.489	-.076
6	.814	5.429	62.653	6. 礼儀正しさ	.373	.161	.651
7	.808	5.387	68.040	7. テニス	.528	.295	-.193
8	.729	4.858	72.898	8. 説教をする	.604	-.176	.142
9	.686	4.577	77.475	9. 農家	.666	-.183	.073
10	.667	4.444	81.919	10. 恋愛をする	.605	.181	-.082
11	.619	4.130	86.049	11. アイドルのコンサート	.634	-.033	-.220
12	.596	3.975	90.024	12. 面倒見の良さ	.455	.161	.577
13	.536	3.576	93.600	13. 政治家	.483	-.327	.240
14	.496	3.304	96.904	14. ゲートボール	.379	-.575	-.071
15	.464	3.096	100.000	15. 大胆さ	.436	.201	.245

3. ステレオタイプ得点の背景要因の検討(重回帰分析)

次に得られたステレオタイプ得点がどのような背景要因から影響を受けているのかを検討する。本稿では、以降、重回帰分析およびロジスティック回帰分析を行うため、以下の表7のように変数を設定した。

表7 独立変数の変換一覧

F1 性別：男性を1，女性を0，F2 祖父母との同居：同居を1，いない・別居を0
 F3 家族・親戚における外国人／障害者の存在：有を1，無を0
 Q2 授業理解度・Q4 家の新聞購読の有無・Q5 家族内の会話・行動習慣・Q6 家族内の話題・
 Q8 家族における配慮を必要とする人の世話・Q9 学校内における配慮を必要とする人との
 関わり・Q10 学校外における配慮を必要とする人との関わり・Q12 家の外での配慮を必要
 とする人の世話：あてはまる・よくあるを高値，あてはまらない・ほとんどないを低値

次にステレオタイプ得点の背景要因を検討する。表8には、ステレオタイプ得点【ジェンダー】，ステレオタイプ得点【世代】を従属変数とした重回帰分析(強制投入法)の結果を示した⁴⁾。

表8の結果によれば、標準化係数の大きさに留意する必要があるものの、全体的な傾向として、ジェンダー，世代のステレオタイプ得点に影響を及ぼす要因に大きな違いは見られなかった⁵⁾。正の影響を与える要因としては、「性別(ダミー：男である)」，「家族は、

テレビを見ながら、番組を話題に話をする」、「家族は、旅行に行く」、「自分の住んでいる町のことについて、家族で話す」などが挙げられる。これに対してステレオタイプ得点に負の影響を与える要因としては、「家族は、読んだ本や雑誌について、話をする」、「家族は、新聞の記事について、話をする」、「家族は、博物館や美術館に出かける」、「政治や社会の問題について、家族で話す」などが挙げられる。

これらの結果から考えられるのは、自分の住んでいる町について話す、テレビ番組を話題に話をするといった、話題となる情報を自らの生活圏内において受動的に受け取ることは、ステレオタイプ得点に正の影響を及ぼしていると考えられる。これに対して、新聞の記事、博物館・美術館・政治や社会問題などは能動的に情報にアクセスしなければならない側面があるが、これらの要因はステレオタイプ得点に負の影響を及ぼしている。

表 8 ステレオタイプ得点の背景要因（重回帰分析）

	【男性－女性】 (Q20)		【若者－高齢者】 (Q21)	
	標準化係数		標準化係数	
	ベータ	VIF	ベータ	VIF
(定数)				
性別 (ダミー：男である)	.106***	1.086	.100***	1.087
授業理解度	.052*	1.085	.110***	1.086
家族は、読んだ本や雑誌について、話を する	-.110***	1.766	-.154***	1.758
家族は、テレビを見ながら、番組を話題 に話をする	.101***	1.510	.181***	1.487
家族は、新聞の記事について、話を する	-.085**	1.627	-.039	1.641
家族は、博物館や美術館に出かける	-.126***	1.312	-.106***	1.312
家族は、海外にいる友人・知人と連絡を 取る	-.031	1.273	-.038	1.285
家族は、旅行に行く	.077**	1.223	.045	1.226
自分の住んでいる町のことについて、家 族で話す	.077**	1.571	.046	1.559
政治や社会の問題について、家族で話 す	-.097**	1.768	-.070*	1.754
【学校内】障害のある子と一緒にクラブ や部活をする	.069**	1.147	.052	1.139
【学校内】障害のある子の悩みを聞いた り、相談に乗ってあげたりする	-.046	1.180	-.089***	1.159
【学校外】障害のある人と隣近所でお 付き合いをする	.052*	1.046	.052*	1.045
【学校外】外国人を近所で見かける	-.083***	1.092	-.039	1.092
【学校外】お年寄りとボランティアとし て関わる	.061*	1.101	.045	1.091
自分の家の外で外国の人の世話	-.076**	1.300	-.039	1.297
モデルの有意確率 (F 値)	.000 (7.408)		.000 (7.408)	
調整済み R ² 乗値	.093		.080	
N	1002		984	

***: $p < .01$, **: $p < .05$, *: $p < .10$

以上の結果を踏まえると、ステレオタイプの認識枠組みの形成には情報に対して、能動的にアクセスするか、受動的に受け取るかが重要な点であると考えられる。受動的に情報を受け取る場合、認識枠組みは外部から与えられたものになると考えられるが、能動的に情報に対してアクセスすることは、自ら認識枠組みを構築していくことに繋がり、カテゴリの相対化に関連していると考えられる。

4. ステレオタイプ得点が行為・認識枠組みに及ぼす影響

本節では、3節で検討したステレオタイプ得点が、行為や他の項目への認識にどう関わっているのかを検討する⁶⁾。

表9 「『共生社会』という言葉の認知」の背景要因（多項ロジスティック回帰分析）

モデル	聞いたことがない			聞いたことがあり、意味も知っている		
	B	標準誤差	Exp(B)	B	標準誤差	Exp(B)
切片	.009	.428		-2.061***	.435	
性別ダミー（男である）	.334*	.177	1.397	.389**	.166	1.475
家族は、食事を一緒にする	.155	.111	1.168	-.165	.112	.848
家族は、新聞の記事について、話を する	-.060	.111	.942	.290***	.097	1.336
家族は、公共の図書館を利用する	-.186*	.106	.830	.160*	.088	1.173
家族は、旅行に行く	-.149	.098	.862	.177*	.093	1.193
家族は、ボランティア活動に参加する	.074	.129	1.077	-.330***	.122	.719
政治や社会の問題について、家族で 話す	-.017	.118	.983	.448***	.112	1.565
障害のある人の生活について、家族 で話す	-.447***	.136	.640	-.257**	.113	.774
【学校内】障害のある子の悩みを聞 いたり、相談に乗ってあげたりする	.595	.556	1.814	1.029**	.450	2.799
【学校外】障害のある人とボラン ティアとして関わる	-.313	.503	.731	.710*	.373	2.034
【学校外】障害のある人を近所で 見かける	-.463**	.201	.629	-.476***	.183	.622
【学校外】外国人を近所で見かける	-.050	.194	.951	.523***	.185	1.688
【学校外】外国人とボランティアと して関わる	1.308***	.456	3.700	.622	.420	1.863
基準カテゴリ	聞いたことはあるが、意味は知らない					
尤度比 χ^2 値	149.026			146.233		
モデルの有意確率	0.000			0.000		
Cox & Snell の 疑似 R ² 乗値	0.147			0.145		
N	934			934		

***: $p < .01$, **: $p < .05$, *: $p < .10$

(1) 『共生社会』という言葉の認知

まず、独立変数を表7に示した項目およびステレオタイプ得点【ジェンダー】、ステレオタイプ得点【世代】、従属変数を『共生社会』という言葉の認知」として、基準カテゴリを「聞いたことはあるが、意味は知らない」群とし、多項ロジスティック回帰分析を変数増加ステップワイズ法で行った結果が表9である⁷⁾。

表9の結果によれば、ステレオタイプ得点【ジェンダー】およびステレオタイプ得点【世代】は10%水準の有意確率の範囲では「共生社会」という言葉の認知には影響を及ぼさないということが示された。つまり、認識枠組みとしてステレオタイプを用いるかどうかは、「共生社会」という言葉の認知には影響を及ぼさないということである。

(2) 「高齢者」に関すること

また、同様にして、「困っている他者への手助け志向」(Q11)、「社会問題となりうる『違い』の認知」(Q13)、「自己の社会的帰属意識」(Q22)について多項ロジスティック回帰分析を行ったうちで、ステレオタイプ得点【ジェンダー】またはステレオタイプ得点【世代】が有意な独立変数として、投入された質問項目について、以下の表10～表13に結果を示す⁹⁾。また表10～表13にはステレオタイプ得点を含むモデル(モデル2・モデル3)と含まないモデル(モデル1)を表中に示した。まず、表10には「困っているお年寄りに積極的に手助けしたいと思う」ことの背景要因の検討結果を示す。

表10の結果を見ると、ステレオタイプ得点【世代】が、「困っているお年寄りに積極的に手助けしたいと思う」ことに対して有意に正の影響を及ぼしている。これに対してステレオタイプ得点【ジェンダー】は有意に影響を及ぼしていない。また、ステレオタイプ得点【世代】を含むモデル(モデル2)と含まないモデル(モデル1)を比較すると、他の独立変数のExp(B)に大きな変化はなかった⁸⁾。つまり、他の独立変数がステレオタイプ得点を媒介して、困っているお年寄りに積極的に手助けしたいと思うことに影響を及ぼしていないと考えられる。

これらの結果から、①「世代」のカテゴリの認識枠組みとしてステレオタイプを用いる者が、困っている高齢者を手助けしたいと考えている、②「ジェンダー」のカテゴリの認識枠組みとしてステレオタイプを用いるかどうかは高齢者を手助けすることとはあまり関係がない、③他の独立変数がステレオタイプ得点を媒介して高齢者を手助けすることに対してあまり影響を及ぼしていない、と考えられる。

表 10 「困っているお年寄りに積極的に手助けしたいと思う」ことの背景要因
(多項ロジスティック回帰分析)

	モデル1			モデル2			モデル3		
	B	標準 誤差	Exp(B)	B	標準 誤差	Exp(B)	B	標準 誤差	Exp(B)
切片	-1.578***	.339		-1.610***	.340		-1.602***	.341	
性別ダミー (男である)	-.483***	.147	.617	-.516***	.148	.597	-.514***	.148	.598
家の新聞購読の有無	-.500***	.172	.607	-.496***	.173	.609	-.497***	.173	.608
家族は、ネットで見たことについて、話をする	-.220***	.081	.803	-.215***	.082	.807	-.217***	.082	.805
自分の住んでいる町のことについて、家族で話す	.298***	.095	1.348	.299***	.095	1.348	.300***	.095	1.349
お年寄りの生活について、家族で話す	.179*	.093	1.196	.189**	.093	1.208	.188**	.093	1.206
【学校外】外国人とボランティアとして関わる	.686	.424	1.986	.709*	.426	2.031	.708*	.426	2.029
【学校外】お年寄りと隣近所で付き合いがある	.364**	.151	1.439	.353**	.152	1.423	.352**	.152	1.422
自分の家の外で自分よりも小さい子の世話	.212**	.084	1.236	.213**	.084	1.238	.212**	.084	1.236
自分の家の外でお年寄りの世話	.458***	.101	1.581	.463***	.101	1.588	.463***	.101	1.589
ステレオタイプ得点【世代】				.156**	.073	1.169	.182*	.097	1.199
ステレオタイプ得点【ジェンダー】							-.040	.098	.961
基準カテゴリ				非選択					
尤度比 χ^2 値	157.072			161.654			161.818		
モデルの有意確率	0.000			0.000			0.000		
Cox & Snell の疑似 R ² 乗値	0.154			0.158			0.158		
N	938			938			938		

***: $p < .01$, **: $p < .05$, *: $p < .10$

次に表 11 には「『世代』の違いが『社会で問題となりうる』と思う」(Q13_1) ことの背景要因の検討結果を示す。

表 11 では、ステレオタイプ得点【世代】が、「『世代』の違いが『社会で問題となりうる』と思う」ことに対して有意に正の影響を及ぼしている。これに対してステレオタイプ得点【ジェンダー】は有意に影響を及ぼしていない。また、ステレオタイプ得点【世代】を含むモデルと含まないモデルを比較すると、他の独立変数の Exp(B) に大きな変化はなかった。

これらの結果を考慮すると、やはり高齢者に関する事に関しては、世代に関するステレオタイプの認識枠組みを用いる者ほど、「世代」の違いが「社会で問題となりうる」と考えられているようであるが、他の背景要因による影響を媒介する効果は小さいといえる。

表 11 「『世代』の違いが『社会で問題となりうる』と思う」ことの背景要因
(多項ロジスティック回帰分析)

	モデル 1			モデル 2			モデル 3		
	B	標準 誤差	Exp(B)	B	標準 誤差	Exp(B)	B	標準 誤差	Exp(B)
切片	.156	.331		.153	.331		.187	.333	
性別ダミー (男である)	.371***	.133	1.449	.361***	.134	1.434	.351***	.134	1.420
家族は、食事を一緒に にする	-.199**	.080	.819	-.198**	.081	.820	-.203**	.081	.816
【学校内】障害のある 子とクラスで一緒に 勉強する	.406*	.242	1.502	.408*	.242	1.504	.435*	.243	1.544
【学校外】お年寄り を近所で見かける	.347*	.209	1.415	.352*	.209	1.422	.333	.210	1.396
ステレオタイプ得点 【ジェンダー】				.049	.067	1.050	-.050	.089	.951
ステレオタイプ得点 【世代】							.149*	.089	1.160
基準カテゴリ	非選択								
尤度比 χ^2 値	18.513			19.036			21.867		
モデルの有意確率	0.001			0.002			0.001		
Cox & Snell の 疑似 R ² 乗値	0.020			0.020			0.023		
N	938			938			938		

***: $p < .01$, **: $p < .05$, *: $p < .10$

(3) 社会的カテゴリへの自己の帰属

次に表 12 には「『男である, 女である』ということ意識する」(Q22_1) ことの背景要因の検討結果を示す。

表 12 では, ステレオタイプ得点【ジェンダー】が, 「『男である, 女である』ということ意識する」ことに対して有意に正の影響を及ぼしている。これに対してステレオタイプ得点【世代】は有意に影響を及ぼしていない。また, ステレオタイプ得点【ジェンダー】を含むモデル (モデル 2) と含まないモデル (モデル 1) を比較すると, 他の独立変数の Exp(B) に大きな変化はなかった。

次に, 表 13 には「『若者である』ということ意識する」(Q22_5) ことの背景要因の検討結果を示す。

表 13 では, ステレオタイプ得点【世代】が, 「『若者である』ということ意識する」ということを意識する」ことに対して有意に正の影響を及ぼしている。これに対してステレオタイプ得点【ジェンダー】は有意に影響を及ぼしていない。また, ステレオタイプ得点【世代】を含むモデル (モデル 2) と含まないモデル (モデル 1) を比較すると, 他の独立変数の Exp(B) に大きな変化はなかった。

表 12 「『男である，女である』ということ意識する」ことの背景要因
(多項ロジスティック回帰分析)

	モデル1			モデル2			モデル3		
	B	標準誤差	Exp(B)	B	標準誤差	Exp(B)	B	標準誤差	Exp(B)
切片	-.191	.274		-.280	.278		-.284	.278	
家の新聞購読の有無	.291*	.171	1.338	.293*	.172	1.341	.294*	.172	1.342
家族は，ネットで見たことについて，話をする	.191**	.078	1.210	.199**	.079	1.221	.199**	.079	1.220
家族は，博物館や美術館に出かける	-.216**	.100	.805	-.186*	.101	.830	-.184*	.101	.832
外国や外国の人たちの様子について，家族で話す	.286***	.087	1.332	.298***	.087	1.347	.298***	.087	1.347
【学校内】外国人の子と親しく話をする	-.566**	.235	.568	-.546**	.236	.579	-.553**	.236	.575
【学校外】お年寄りや隣近所で付き合いがある	.321**	.148	1.379	.318**	.149	1.374	.315**	.149	1.370
ステレオタイプ得点【ジェンダー】				.155**	.075	1.167	.122	.098	1.130
ステレオタイプ得点【世代】							.049	.095	1.050
基準カテゴリ	ない群								
尤度比 χ^2 値	157.072			161.654			161.818		
モデルの有意確率	0.000			0.000			0.000		
Cox & Snell の疑似 R ² 乗値	0.154			0.158			0.158		
N	938			938			938		

***: $p < .01$, **: $p < .05$, *: $p < .10$

以上，表 12，表 13 の結果から，他者への社会的カテゴリの認識枠組みとしてステレオタイプを用いる者は，自己の社会的カテゴリへの帰属意識も強いということが示された。ただ，この際，特定の事象に対しての認識枠組みが，他の事象への認識枠組みの傾向へと影響することはないようである。つまり，ジェンダーに関する認識枠組みとしてステレオタイプを用いているからといって，世代に関する自己のカテゴリ帰属を意識するわけではないということである。

(4) 本節の小括

以上，本節ではロジスティック回帰分析での検討結果を基に分析を進めてきた。これらの結果から見てきたのは，大きく分けて次の四つの点である。

第一に，社会的カテゴリの認識枠組みでステレオタイプを用いるかどうかは，特定の事象の範囲内で完結するという点である。これは「ジェンダー」の認識枠組みの影響が高齢者に関する行為や認識に影響を及ぼしていないことから確認できる。2節で確認したようにステレオタイプ得点【ジェンダー】とステレオタイプ得点【世代】の相関係数は比

較的高く、特定の事象に対してステレオタイプの認識枠組みを用いる者は、他の事象に対してもステレオタイプの認識枠組みを用いやすいといえるが、その適応範囲については基本的には切り分けられているといえる。

第二に、特定の行為や認識に対しては、ステレオタイプを認識枠組みとして用いるかどうかを媒介して影響を及ぼしているとはいえ、今回、独立変数として設定したそれぞれの背景要因は、認識枠組みから独立して、行為や認識に影響を及ぼしているということが明らかになった¹⁰⁾。

第三に、他者への社会的カテゴリの認識枠組みとしてステレオタイプを用いる者は、自己の社会的カテゴリへの帰属意識も強いということが明らかになった。

第四に、「世代」に対してステレオタイプの認識枠組みを用いる方が、高齢者に対して積極的な手助けをしたいと思うということが明らかになった。「高齢者」「若者」という「世代」カテゴリの認識枠組みを採用している方が、「高齢者」への援助志向は促進されるようである。ただし、ステレオタイプの認識枠組みを用いている者が、手助けしたいと思う「高齢者」はステレオタイプの「高齢者」であることには留意しておく必要がある。

表 13 『若者である』ということ意識する」ことの背景要因
(多項ロジスティック回帰分析)

	モデル 1			モデル 2			モデル 3		
	B	標準誤差	Exp(B)	B	標準誤差	Exp(B)	B	標準誤差	Exp(B)
切片	-.227	.267		-.207	.270		-.216	.271	
家族は、テレビを見ながら、番組を話題に話をする	.251***	.081	1.286	.234***	.081	1.264	.236***	.081	1.266
自分の住んでいる町のことについて、家族で話す	.151*	.088	1.163	.171*	.090	1.186	.173*	.090	1.188
【学校内】外国人の子とクラスで一緒に勉強をする	.881**	.418	2.413	.894**	.419	2.445	.898**	.419	2.454
【学校内】外国人の子が学校生活で不利にならないように手助けをする	-1.151***	.440	.316	-1.154***	.442	.315	-1.151***	.441	.316
【学校外】お年寄りとボランティアとして関わる	.482**	.239	1.619	.459*	.240	1.582	.455*	.241	1.576
ステレオタイプ得点【世代】				.237***	.072	1.267	.208**	.094	1.231
ステレオタイプ得点【ジェンダー】							.045	.096	1.046
基準カテゴリ	ない群								
尤度比 χ^2 値	32.603			43.376			43.599		
モデルの有意確率	0.000			0.000			0.000		
Cox & Snell の疑似 R ² 乗値	0.320			0.043			0.043		
N	993			993			938		

***: $p < .01$, **: $p < .05$, *: $p < .10$

5. 日本の社会への意識

次に、ステレオタイプ得点が、現状の日本社会に対しての認識にどう関わるのかについての分析を行う。そこで、まずは「日本社会の現状認識」(Q15)の質問項目の主成分分析を行い、主成分得点を得た結果を表14に示した。

表14を見ると主成分1は学歴を除くすべての項目に正の負荷量をとっていることから、学歴を除いた日本社会に対して満足しているかどうかという指標に用いることができる。そこで、ここでは主成分1の主成分得点を「日本社会への現状満足度」の指標とし、ステレオタイプ得点の関係性について検討する。

表15には、表7に示した項目およびステレオタイプ得点¹¹⁾を独立変数として、主成分1「日本社会への現状満足度」の重回帰分析(ステップワイズ法)を行った結果を示した。

表15を見ると、ステレオタイプ得点の標準化係数は正となっている。つまり、ステレオタイプを用いているほど、「日本社会への現状満足度」が高い傾向があるといえるだろう。この結果は、ステレオタイプな認識を持つ人々は現状の社会に満足しているということを示しており、マジョリティは現状の社会を維持する傾向にあると考えられる。

表14 「日本社会の現状認識」の質問項目の主成分分析

成分	初期の固有値				成分		
	合計	分散の%	累積%		1	2	3
1	4.754	33.956	33.956	1. 女性が働きやすい社会	.558	.296	-.211
2	1.397	9.981	43.936	2. 性的マイノリティ(少数者)の人が暮らしやすい社会	.538	.154	-.458
3	1.136	8.114	52.051	3. 障害のある人が暮らしやすい社会	.677	.215	-.124
4	.981	7.010	59.061	4. 高齢者が暮らしやすい社会	.584	.228	.124
5	.936	6.684	65.745	5. 若者が暮らしやすい社会	.458	.421	.251
6	.797	5.690	71.434	6. 外国人が暮らしやすい社会	.600	.395	.138
7	.717	5.120	76.555	7. 人々の意見や行動が大切にされる社会	.674	-.002	-.099
8	.660	4.714	81.269	8. 子どもの意見が取り入れられやすい社会	.661	-.133	-.288
9	.546	3.902	85.171	9. 学歴がものを言う社会	.058	.329	.469
10	.543	3.878	89.049	10. 子育てしやすい社会	.669	.078	-.121
11	.468	3.345	92.394	11. 誰もが同じくらいに豊かに暮らせる社会	.652	-.549	-.018
12	.419	2.993	95.387	12. どこに住んでも同じように暮らせる社会	.612	-.572	.036
13	.376	2.687	98.073	13. 安心・安全に暮らせる社会	.474	-.252	.586
14	.270	1.927	100.000	14. 人々が助け合って生きている社会	.646	-.172	.311

表 15 「日本社会への現状満足度」の背景要因（重回帰分析）

	標準化係数	
	ベータ	VIF
(定数)		
祖父母との同居	-.079**	1.276
授業理解度	.091***	1.075
家族は、ネットで見たことについて、話をする	.073**	1.299
家族は、ボランティア活動に参加する 家族は、ボランティア活動に参加する	.082**	1.201
自分の住んでいる町のことについて、家族で話す 自分の住んでいる町のことについて、家族で話す	.094**	1.499
政治や社会の問題について、家族で話す 政治や社会の問題について、家族で話す	-.133***	1.619
家のなかで、お年寄りの世話をする	.115***	1.525
【学校内】外国人の子と親しく話をする	.092***	1.034
自分の家の外でお年寄りの世話 自分の家の外でお年寄りの世話	.073**	1.301
ステレオタイプ得点	.100***	1.036
モデルの有意確率 (F値)	.000 (8.418)	
調整済み R ² 乗値	.084	
N	926	

***: $p < .01$, **: $p < .05$, *: $p < .10$

6. おわりに

本稿では、社会的カテゴリーの脱構築の代理指標として、ステレオタイプな認識枠組みに着目し、検討してきた。これらの結果、大きく分けて次の五つの知見を得た。

第一に、ステレオタイプな認識枠組みは、情報に対するアクセスの仕方が背景要因として考えられる点である。これは、能動的に情報にアクセスする人は、自らの認識枠組みを相対化する機会が多いこと、逆に受動的に情報を受け取る人は、自らの認識枠組みを相対化する機会が少ないことが理由として考えられる。

第二に、ステレオタイプな認識枠組みを採用することの行為への影響は、「世代」、「ジェンダー」といったそれぞれの領域内でのみ見られるということである。つまり、「ジェンダー」に関してステレオタイプな認識枠組みを採用しているかどうかは、お年寄りに手助けするといった「世代」に関する行為については影響を及ぼさないということである。しかしながら、ステレオタイプ得点間に強い相関があったことや、本調査のデータでは領域間の越境について検討できる項目が少なかったことから、この点については今後も更なる検討が必要であると考えられる。

第三に、属性・経験といった背景要因が、ステレオタイプな認識枠組みを媒介して、行為に影響を及ぼす影響は小さいということである。ステレオタイプな認識枠組みを採用するかどうかというよりは、個々の属性や経験が相対的に強く、行為に影響を及ぼしているようである。

第四に、「高齢者」「若者」という「世代」カテゴリーの認識枠組みを採用している方が、「高齢者」への援助は促進されるように、特定の事象に対してステレオタイプな認識枠組みを採用することは、社会にとって有益な面もあることが示されたことである。

第五に、ステレオタイプの認識枠組みを用いる人々は、現状の社会に満足しているということである。もしくは、現状の社会に満足している人々が、現在、用いられているステレオタイプの認識枠組みに違和感がないために、ステレオタイプの認識枠組みを用いているとも考えられる。いずれにせよ、この点は、特定の事象に対する認識枠組みを、ある一方に維持する作用があることは想像に難くない。第四の知見で提示したように、年齢が高い人は、「高齢者」として認識した方が、「高齢者」も生きやすい側面もあるが、年齢が高い＝「高齢者」という認識では、マイノリティに立たされる人もいる。具体的には、笹野・丹治（2016）が高齢者の中であっても年齢層によって経済状況が多様であることや寺院の住職など特定の年齢を超えても就業可能な職種が存在することを例に挙げながら、一定年齢でカテゴリ化することの限界を指摘している。本稿では、「高齢者」という認識枠組みによって援助が促進されるという結果を提示したが、これによって「高齢者」という認識枠組みの採用に対して、社会的合意がなされるのであれば、これらの社会的カテゴリの更新は行われない。つまり、マジョリティの思考によって社会的カテゴリの認識枠組みを一元化することでは、マイノリティの問題は解決の余地はないということである。

以上の議論から、ある認識枠組みについて社会的合意がなされざるを得ないのであれば、認識枠組みの一元化に問題があるといえる。これを踏まえると、多層的な認識枠組みの採用が求められているといえるだろう。

〔注記〕

- 1) 従来、就業者全体に対して女性が多く占める職業のこと。例えば、看護師（看護婦）、客室乗務員（スチュワーデス）、保育士（保母さん）などがある。
- 2) 厚生労働省の『賃金構造基本統計調査』によれば、看護師の就業者全体に占める男性就業者の割合は5.3%（2001年）から9.3%（2015年）となっている。
- 3) 「共生」にとって社会的カテゴリの更新は、理論的には、マイノリティの認識枠組みの相対化も求められる。しかしながら社会的な問題として問題化する場合においては、マイノリティ側の権利のみが保障され、マイノリティの権利がおろそかになりがちである。つまり、本来どちらも尊重されるはずべきものが、特定の一方に偏りがちな認識枠組み（結果的にマジョリティとなる）によって、他方の認識枠組み（結果的にマイノリティとなる）を持つ者の権利が尊重されないという傾向がある。
- 4) 事前に探索的に重回帰分析（ステップワイズ法）を行った結果を基に独立変数を選定した。事前の探索では、F1 性別、F2 祖父母との同居、F3 家族・親戚における外国人／障害者の存在、Q2 授業理解度、Q4 家の新聞購読の有無、Q5 家族内の会話・行動習慣、Q6 家族内の話題、Q8 家族における配慮を必要とする人の世話、Q9 学校内における配慮を必要とする人との関わり、Q10 学校外における配慮を必要とする人との関わり、Q12 家の外での配慮を必要とする人の世話を独立変数とし、ステップワイズのための有意確率は投入：0.10、除去：0.15 とした。この結果より、【ジェンダー】、【世代】の少なくともどちらか一方で有意であった独立変数を用いて、強制投入法で重回帰分析を行ったモデルが表8である。
- 5) ステレオタイプ得点【ジェンダー】とステレオタイプ得点【世代】のPearsonの相関係数は0.647 ($p = .000$, $N = 1033$)であった。なお、ステレオタイプ得点間の相関係数は中学生のみで分析した場合は0.615 ($p = .000$, $N = 386$)、高校生のみで分析した場合は0.668 ($p = .000$, $N = 647$)となり、学校段階の効果も一部見られた。
- 6) ステレオタイプの認識枠組みが、行為や他の認識にどう影響するかという観点で分析を行うため、以降の分析では、特に必要がない限りは、ステレオタイプ得点【ジェンダー】およびステレオタイプ得点【世代】が有意に影響を及ぼすモデルを中心に示す。
- 7) 変数増加ステップワイズ法では投入検定：尤度比、投入確率：0.10、除去検定：尤度比、除去確率：0.15として分析を行った。

- 8) 一般的に独立変数を追加した際に、他の独立変数の $\text{Exp}(B)$ の値が小さくなった場合、他の独立変数の影響を追加した独立変数が媒介して、従属変数に影響を及ぼしていると捉えられる。
- 9) 提示した結果以外の Q11, Q13, Q22 の他の項目に関しては、ステレオタイプ得点は有意な結果として影響を及ぼさないということも重要な点である。
- 10) ただし、説明率の低さを踏まえると、本調査で独立変数として採用したものが、背景要因をすべてカバーしているとは到底いえず、ステレオタイプを認識枠組みとして用いるかどうかを媒介して影響を及ぼす背景要因が存在する可能性も大いにある。
- 11) ここでは、ステレオタイプ得点についても Q20, Q21 の両方をまとめたものを用いた。Q20, Q21 の質問項目に対しての主成分 1 については、すべての項目に正の負荷量を持ち、同様にステレオタイプ得点と用いても問題ないことを確認している。

【文献】

厚生労働省, 『賃金構造基本統計調査』。

岡本智周, 2011, 「個人化社会で要請される〈共に生きる力〉」岡本智周・田中統治編『共生と希望の教育学』筑波大学出版会, pp. 30-41.

笹野悦子・丹治燕子, 2016, 「『青壮年期/高齢』の区分をめぐって」, 岡本智周・丹治燕子編『共生の社会学——ナショナリズム、ケア、世代、社会意識』太郎次郎社エディタス, pp. 174-192.